

ALP「読解力を鍛えよう」に関する共同研究

The Study of Acquiring Reading Skills through Active Learning

共同研究メンバー

○志賀敏宏*、石川晴子*、齋藤裕美*、中庭光彦*、野坂美穂*、良峯徳和*

(○代表、執筆は分担執筆)

Keywords : Reading Comprehension, Listening Comprehension,
Summarizing Ability, Reading Skill Test

1. 研究目的

本研究は、大学生の読解力構築のための能力情報測定と、現実の読解力向上授業デザインのための実験を並行実施する基礎的研究である。

この両者の因果関係を特定することは非常に困難である。なぜなら、第一に授業効果がすぐには発現しない、第二に読解力の測定モデルが必ずしもミクロの能力構築の変数と結びつくとは限らない、したがって第三に読解能力測定と読解力向上授業デザインの因果関係を前提にすることは困難である。このことは、教員には一定の理解が得られている。

このため、本研究における読解力教育は構成主義の立場をとり、個々の授業の有効性を客観的というよりも、解釈しながら構築しなければならなくなる。この時に、参照する一定の枠組として、読解能力情報の測定は有効といえる。

この認識の下に、2019年度は読解力の基礎データ収集と、AL教育として読解力授業を試行した（ALは2018年度より2回目）。

2. 研究方法

2.1 読解力テスト（Reading Skill Test、以下RST）の実施による現状把握

「(一社)教育のための科学研究所のRST」を用いて、より標準的な方法でリーディングスキル（以下RS）の測定を行い、他校受験者のとのRS比較も行った。受験者78名。

RSの指標は、以下の6点である。

- (1) 係り受け解析：文の基本構造（主語・述語・目的語など）の把握
- (2) 照応解決：指示代名詞が指すもの、省略された主語や目的語の把握
- (3) 同義文判定：2文の意味が同一であるかどうかの判定
- (4) 推論：学校知識と日常常識から文の意味を理解
- (5) イメージ同定：文章と図・グラフと比べて、内容の一致を認識

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

(6) 具体例同定（辞書）：辞書の語彙定義を読んで合致する具体例を認識

2.2 AL「読解力を鍛えよう」

単位付与者 35 名に聴解力と要約力をつける方法を覚えさせる授業を行った。そして事前・事後のアンケート調査を行った。

<授業内容>

(1) 聴解力向上

①語彙、現実照応（中庭）

文章の朗読を参加者に聴いてもらい、話された内容の書き起こしをしてもらう。各自スマートフォンで録音を同時に行ってもらい、何度も聞き直して原稿用紙に書いてもらう。不明な言葉を調べさせた後、書かれた内容と具体的な写真の同定を意識して見せ、語彙と書かれた内容について PPT による説明を行った。

②聴解からの図式化、資料事実の整理（野坂）

読み上げた情報に沿って資料を正しく読み取り、事実の整理を行うことを狙いとした問題を幾つか出題した。一つ目は「地図を読み取る」問題で、出発地から目的地までの経路を読みあげ、その方角を正しく読み取ったうえで施設等の位置関係を明らかにするというものである。二つ目は、「宅配物に関する表」を読み取る問題で、読み上げた内容に基づき、荷物のサイズ区分、配送の距離区分、運賃一覧表という三つの表を総合的に捉えたうえで解答を導出するというものである。上記の二つの問題は、読み上げの分量は少ないが、読み上げた情報の一つ一つを聞き漏らすことなく、順序立てて資料を正しく読み取らなければ解答が導きだせないため、学生は想定以上に時間を要した。

③重要性識別、テーマ推定（良峯）

読み上げのテキストは、日本語検定試験問題 1 級の問題文から選んだ。分量が多く、内容もバラエティに富んでいるため、限られた時間内で的確に内容を理解するには、提示される情報（語彙）に適切な関連性（relevance）を見出し、会話のテーマが何であるか、発話者の意図がなんであるかをすばやく把握する必要がある。

音声を聴きながら、必要な情報を正確にメモする、キーワードを使って話された内容を構造化し、図示するという作業を課すことで、重要な語彙や情報を相互に関連づけ、全体のテーマのもとにまとめるという理解プロセスを、具体的、体験的に学ぶことを目指した。

(2) 要約力向上

①係り受けに着目した縮約、照応に着目した縮約（齋藤 S）

要約は対象となる文章全体の内容を把握した上で要点を見極める必要があるため、要約力向上の第一ステップとしては難易度が高いと思われる。そこで、対象となる文章全体から万遍なく語句を削除し簡潔な表現を探る縮約を通して文構造を理解することを狙いとし

た。練習問題は100～150字程度の短文を中心に構成し、主語と述語、修飾語と被修飾語の関係を崩さないようにすることで係り受けを意識させ、また代名詞が指しているものを変更しないようにすることで照応を意識させる問題とした。

②キーワードによる要約、論理の理解（志賀）

③構造的読解、論理的読解（石川）

文構造、論理構造を意識し、素早く的確に内容をつかむことをねらいとした演習授業を行った。文の構造的読解について理解を深めるため、まずは1～2行の短文レベルで、否定の範囲や語や句の修飾関係など構造的な理由により複数の解釈が存在する「あいまい文」を取りあげて説明、演習を行った。その後、ある程度まとまった量の文章を読む際にポイントとなる(1)文章構成(2)文中キーワード(3)筆者の主張とその根拠の把握について説明し、練習問題として「食の安全」に関する1,200文字程度の文章を読み、上記のポイントについて考え、整理しながら、その内容を各自80字以内で要約した。

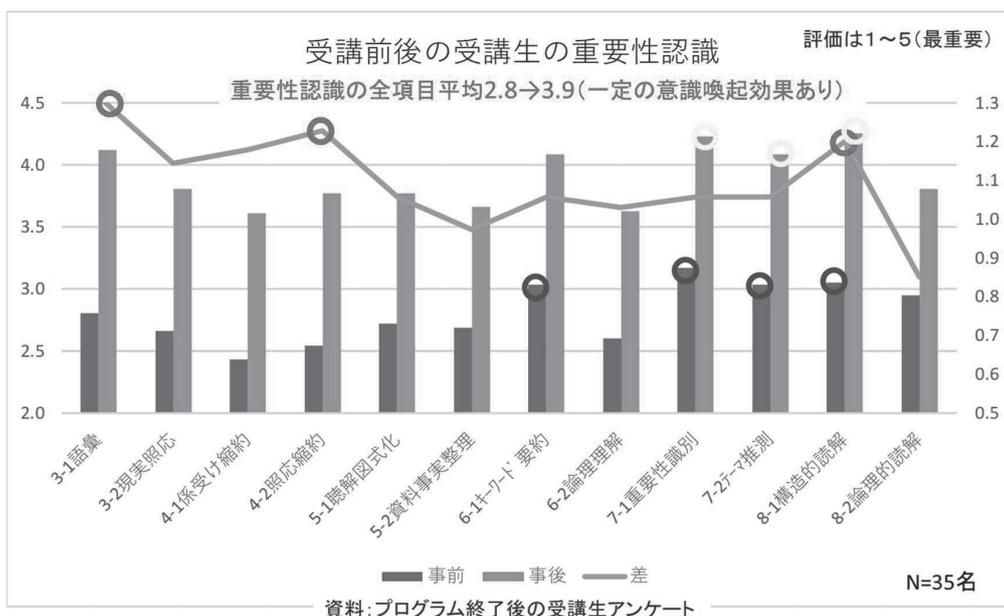
3. 結果

3.1 読解力テスト (Reading Skill Test)

- (1) 本学学生のスコア分布はRSの6指標で、受験大学平均を下回った。
- (2) 特に、イメージ同定、具体例同定、同義文判定の受験大学平均との乖離幅が大きかった。これは、言語の運用能力ではなく、現実世界と言語の対応が低いという「語彙力の低さ」に結びつくことが予想される。

3.2 AL「読解力を鍛えよう」

事前・事後のアンケートから、以下の結果が得られた。



重要性認識の事前・事後差異が大きいのが語彙、照応的縮約、構造的読解であることがわかる。読解力テスト、AL アンケート結果から、新井達による読解力モデルによる限り、イメージ同定、具体例同定といった現実世界を表現する語彙数の少なさが問題点として表れたと言えるだろう。

そして、多くの学生自身は、自分たちの語彙力の低さを実感する場面に直面していないことが推測される。今回の AL プログラムで初めてそれを実感したという自由回答も少なくない程度見られた。

4. 次年度への示唆

(1) RST 受験者のコントロール

2019 年度は RST 受験初回ということもあり、希望者には全て受験を許可した。次回以降はサンプルのコントロールを行うことが必要となる。

(2) 学生の読解力に応じた教授法の必要

既に一定の読解力を身につけた学生も入学しており、語彙力の水準を意識した教授法を開発する必要がある。

(3) 指標間の関係の明確化

新井達によるモデルは段階モデルでもなければ、相互の指標の関係についても明確ではない。一定の読解力を身につけた学生の場合、どのような指標の関係あるいは複合が見られるのか分析が必要となる。

(4) 読解力教授法の新たな開発

先の情報を踏まえ、新たな読解力教授法を構成的に構築する必要がある。

参考文献

新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社、2018